


緒方貞子メモリアルギャラリー

Data
 OPEN : 9:00~21:30
 休館日 : 年末年始
 住所 : 〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5 JICA市ヶ谷ビル
 TEL : 03-3269-2911
 FAX : 03-3269-2054

Access
 JR中央線・総武線「市ヶ谷」駅下車 徒歩10分
 都営地下鉄新宿線「市ヶ谷」駅 A1出口 徒歩10分
 東京メトロ有楽町線・南北線「市ヶ谷」駅 6番出口 徒歩8分

入場無料



来場者の声

平和は望んで
手に入るものではないから嬉しいんだと感じました

自分たちだけで
解決するのではなく、
みんなで一緒に考え
たいと思いました

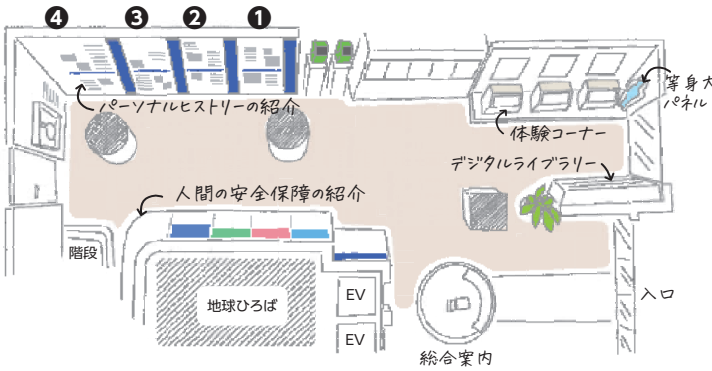
もっと勉強します!
やさしい世界を
つくるために

行動しないこと
には何も始まらない
と痛感しました

見よう! 知ろう! 伝えよう!

【パーソナルヒストリー】

- 1 誕生から学生時代
- 2 大学教授・国連時代
- 3 UNHCR時代
- 4 JICA時代



ひとりの女性として
結婚・出産・育児とひとりの女性、母親として生き、数々の紛争の現場に赴いた緒方さん。そのまなざしが多くの難民を包み込んでいる。

紛争下での人道支援
「難民たちの苦境を終わらせるには、紛争そのものを終わらせるしかない」との信念の下、国連難民高等弁務官として10年間、難民に寄り添った。

「人間の安全保障」も学べる
緒方さんが実現に努力した人間の安全保障も学べる。JICA地球ひろばでは、2022年9月5日から2023年1月19日まで「人間の安全保障」に関する展示を行っている。

“I came from the kitchen to the UN. (*)” 緒方貞子という生き方を紐解く。

1976年に女性初の国連大使に任命された緒方貞子さんは、戦乱から逃れて家や土地を失った人たちのために世界を飛び回り、「人間の安全保障」の実現に向けて大きな功績を残しました。プライベートでは2児の母であり、働く女性のロールモデルともいえる緒方さんの功績や原動力を「緒方貞子メモリアルギャラリー」の展示を通じて紐解きます。

(*)緒方さんは、初めて国連の場に行った際「台所から国連にまいりました」と自己紹介をした



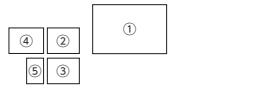
1995年 ザイール(©UNHCR/Panos Moutzis)

自分の国だけの平和はありえない。
世界はつながっているのだから。
A country cannot sustain peace by itself. The world is interconnected.

2003年 国連(UN Photo/Eskinder Debebe)



2008年 シリア



- ①ザイール(現コンゴ民主共和国)に逃れたルワンダ難民の子供たちと
- ②シリア・アレppoにあるパレスチナ難民キャンプの学校を訪問
- ③2005年には大津波被害に見舞われたインドネシア・スマトラ島を訪れた
- ④「人間の安全保障委員会」報告書を共同議長アマルティア・セン氏と共にアナン国連事務総長に手渡す
- ⑤ユーゴスラビア紛争下のサラエボ空港にて



1992年 サラエボ(©UNHCR/Sylvana Foa)



2005年 スマトラ島

緒方貞子 Sadako Ogata プロフィール

1927年、東京生まれ。曾祖父は犬養毅元首相で「貞子」の名付け親。外交官だった父の影響で幼少期を米国、中国で過ごす。大学は一期生として聖心女子大学に進学。1976年日本人女性として初の国連大使に就任。91年には女性初の国連難民高等弁務官に。クルド難民危機に際しては、それまで支援対象外だった「国内避難民」も支援対象に拡大。UNHCRにとって大きな転機となる決断を下した。その後も旧ユーゴスラビア紛争、ルワンダ大虐殺など、各地の紛争地から逃れる難民支援に奔走。防弾チョッキ、ヘルメット姿で現場を飛び回る緒方さんの姿が世界中にインパクトを与えた。アフガニスタンでは復興支援特別代表として活躍した。JICA理事長に就任したのは2003年。人間の安全保障の実践と現場主義の徹底を唱え続けた。2019年10月、逝去。

判断基準は生命を助けること

緒方貞子さんが女性初、日本人初の国連難民高等弁務官(UNHCR)に就任した1990年代は、イランのクルド難民、ユーゴスラビア紛争、ルワンダ虐殺など人道危機が絶え間なく起きた時代でした。「私はあまりにも多くの難民の目のなかに恐怖と苦痛を見ました。それらを保護・救済され、援助を受けられる安心感に変え、さらには生まれ故郷に戻れるという、心躍る喜びに変えようと、皆さん全員と一体になって取り組んできました。このことが私の原動力であったと信じております(国連難民高等弁務官・退官挨拶、2000年12月)

ルールを変えるという決断

難民は「国境の外に出てきた人」と定義づけられていたが、イラク領内のクルド人救済などの際、緒方さんはルールを変える決断をしました。「人は生きてさえいれば次のチャンスが生まれるはず」という信念を持っていたからです。

とことん「現場主義」を貫く

2003年10月から2012年3月まで、緒方さんは理事長としてJICAを率いました。人間の安全保障の実現に向けて、現場のニーズを捉える「現場主義」を貫きました。「国づくりはもちろんです。その意味では、政府の行政能力や統治など上からの力をつけることも大切ですが、社会の自治性を高めることも非常に大切になります(緒方貞子編『転機の海外援助』P.15 NHK出版)